昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和三十九年十二月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通第一八八号）

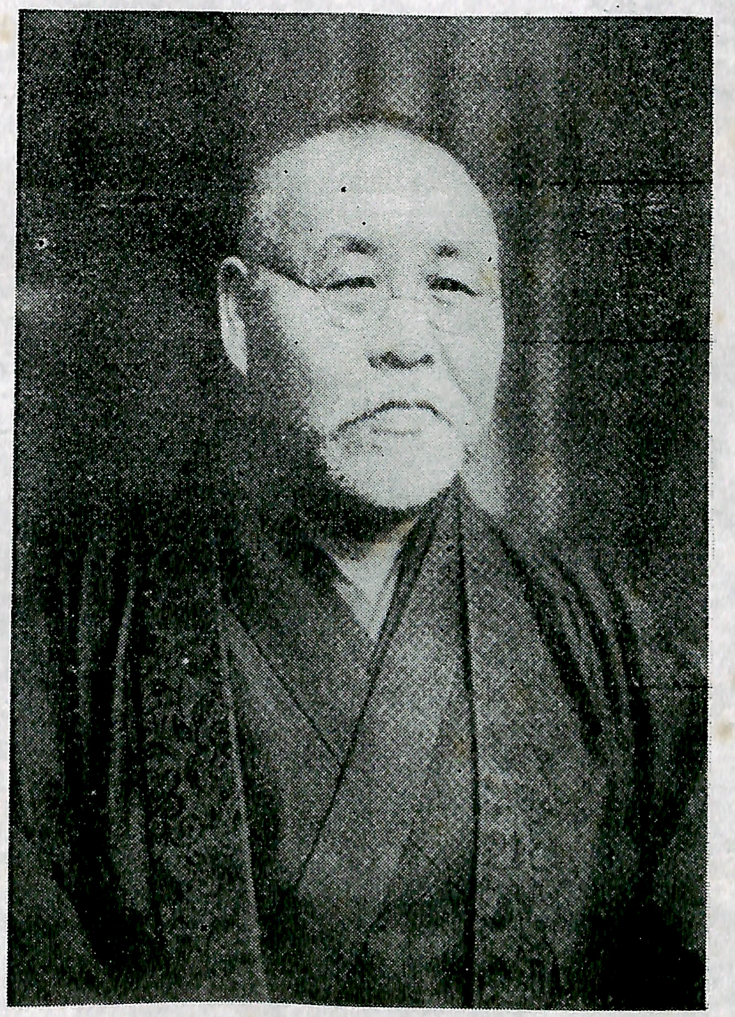
慈光

第十六巻 第十二号
第十七巻 第一号

合併号

目次

思想の徹底と建現……近角常観……(2)
人生問題と信仰（二）……福島政雄……(16)
老苦について……花田正夫……(34)



近角先生御病後（昭和七年）の影

思想の徹底と建現

（註）昭和六年、明治節を中心として、十一月二日三日四日、広島文理大学及高等師範学校内における仏教青年会の主催により、同講堂に於いて、「信仰の実験より見たる思想問題の解決」「信仰の徹底より建現する秩序ある世界」「律法主義と自然主義」の演題にて講話、十数年来待ち受けられし福島政雄教授の真摯なる告白及び紹介は、極度に講演者及び満堂の聴衆を緊張せしめた。

又広島市教育課の主催にて、学生懇話会にて又全市小学教員七百人会合して、最近教育者に賜りし勅語奉載式の後「信仰的軌範として十七憲法」を講話した。

引続き同五日六日福岡女子専門学校内仏教青年会及び求道有志の主催によりて、同校講堂及び同市仏教青年会館において講話した。同市における学生市民は勿論、数年来待ち受けられし九州全体の同朋来集され、毎回二千人をこえた。ここに掲げたるはその講話である。

（編集私註）この御講話後、一度東京の会館に帰りになり、又御自坊の滋賀県での御法要を終られて、求道会館の報恩講中の

近角常観

十一月廿八日に突然脳溢血の発病、爾来御不自由な御身体で会館の日曜講話はお続けになられましたが、先生の信念の全体を、大衆吐露を前にして講話して下さつたものでは、これが最後のものでありましよう。

本年も先生の御忌月を前にいたしまして近角真観様にお願い申して、本誌に信界建現誌から再録させて頂きました。本稿はすでに十四年前に、慈光第二巻一号に頂いておりましたが、繰り返し〳〵御示教を蒙りたい心から再録させて頂きます。大方の皆様の御諒承を願い上げます。

昭和三十九年十一月　聚墨生

一

この度は女子専門学校内にある仏教青年会、及び御有志のお催しで、はからずも、かくの如く多数の皆さまが御来聴下さいましたこの席で、私の信仰上のことについてお話を申しあげ、御清聴を煩わすことは、非常な光栄と思うところであります。

回顧すれば昭和二年の暮におきまして、しかもこの席で

皆様にお話をきいて頂いたことがあります。それより以来恰も満四年、その間、宗憲改正、宗教団体法案、僧籍削除の問題が起りました。

私は全国各地の同志の方々を煩わし、或は多くの識者の御援助の下にいろ〳〵な運動を致しました。その間是非御当地にあがつて、私の所信をお話するようにとの御希望もあり、また私も是非きいていただきたいと思つて居つたのでありますが、遂に四年間というものはその暇を得ず、その機会を与えられなかつたのであります。然るところ、この度、女子専門学校仏教青年会の方々は勿論、有志の方々、および教職員の方々あたりからも、いろ〳〵と親切な仰せでもあり、はからずもお目にかかることを得たのであります。

二

今日は、宗教に関する問題について申上げたいことは種々ありますが、今夜はそれらの事柄を詳しく申述べるのはやめて、主として私が、かく宗教上の問題について色々と行動して居ります処の根底、即ちそれは私の心に抱いて居るところの信念からいろ〳〵現われて居るのでありますから、その根本となつて居る処のそのものについてお聞き願いたいと思うのであります。即ち、それは私の信仰が如何なるものか、ということを聴いて頂くことになるのであります。

後程お話し申そうと思いますが、私は今より三十年前、第一回宗教法案の時に、全国的運動を起しました。その後西洋に三年程参りました。そうして深く考えましたには、日本の宗教問題を解決するには、ただ政治的に行動したり、運動したりすることでは到底出来るものではない。それは各自の信念によらねばならぬと考えたのであります。即ち私の得たるところの信仰によつてのみ解決出来ると考えたのであります。この信仰を社会各部の人に得て貰つたならば、他の区々たることに力を用いずとも、その信仰の力一つで問題は解決出来ると考えたのであります。

そこで私は明治三十五年帰朝いたしまして以来、求道学舎、求道会館なるものをつくり、三十年間にわたつて、主として都下の学生諸君を初め、全国の方々に、私の信仰をきいて頂いたのであります。而して専らこれに力を入れて爾来は別に社会に対して、宗教に関する運動らしいこともいたしませんでした。

然るところ大正十二年頃を初めと致しまして、色々宗教に関する問題が起り出したものでありますから、遂に私も絶対信仰の立場から、これに対してものを言わねばならぬことになつたのであります。その他宗教内部においてもいろ〳〵な事件が起つてまいつたのであります。

三

私がこの度こちらに参りますについての、女子青年会及び有志の、御希望なり要求というものは何であるかというと、恐らく、この外部に現われたる運動の傾向、若しくは現状などということにつき聴きたいのでなくして、かくの如く私の活動を促すところの信念なるものは、どういう具合のものであるかということを聴きたいのが希望であろうと思います。

もつと進んで云えば、主催者である仏教青年会及有志は勿論のこと、いやしくも今日、思想問題、国家問題、はた国際問題について考えて居らるる方々が、その解決の源は何であるか、その源を求めんとせらるるであろうと思います。されば私は申したいのであります。あらゆる問題を解決するところの源は、それは外ではない、タダ信念の確立にあると言いたいのであります。

しからば、その信念は如何にして得られるか。——この問題の解決が、私としては三十年、四十年来話している問題であります。さて今日は斯く多人数お集り下さつたのでありますから、これについて私の考えをば徹底的にお話し申上げ、そうしてこれを諒解して頂きたいと思うのであります。しかしこれは非常に難事であります。またお話するにつきても、私は何等の深い心組も用意も持ちませぬ。

されど私の長き三十年間に於いて、実験いたしましたところの、生きたる信念なるものが私の方寸のなかにはあるのでありますから、それをタダ思うがままに、時間の許す限り、お話いたしたいと思うのであります。

四

そこで第一番にお話したいことは、私のこの信念が確立したのは、どういう具合であるかという告白であります。これは私の話を度々お聴きになり、又は著書をお読みになつた方は充分御承知とは思いますが、そうでない今日お集りの多くの方々のために繰返して聴いて頂く必要があると存じます。

一体宗教というものは、いろ〳〵な概念的なものを持つて来たり、或は念仏称えて、タダ有難い〳〵の言葉を弄するというようなことでなくして、実際現実に生活している人生、——この人生というものに直面して、信仰というものは、生れて来ねばならないということであります。

我々が人生の問題を考えずして、直ちに宗教を考えるのは、それはあだかも紙もなく、カンバスもなくして画を描かんとするのと同じであります。すなわち宗教のバツクは人生であります。でありますから、この人生というものは如何なるものであるかということをばよく、先ず考えねばならぬのであります。

そうしますと、我々の人生をよく見ると、人間、吾々の生活なるものは、お互に自分々々の考えを絶対的なものとして、取扱つて居ることを発見するのであります。

たとえば、自分が善いと思うことは、何処までも善なりと考え、従つて他のすることは悪に考えて居る。そうして自分の善は、何処までも絶対的のものであるかに、考えて居るのであります。

しかしこれは錯誤であります。各々善といい、悪というのは自分自分の立場から言うて居るのであつて、絶対的のものではないのであります。相対的のものであります。

すべてがこうであります。即ち五分五分のものであります。斯くの如く、人生が相対的で、五分五分であるということに気がつくと、人生の問題はなか〳〵解決が難しくなるのであります。

それについて、先ず私が如何にして人生は相対的なものであるか、ということに気がついたか、覚つたかということを告白したいのであります。

五

それをお話するのには、先ず宗派の問題からお話せねばなりません。やく三十年前のことであります。私共の宗派即ち大谷派本願寺に改革運動が起つたのであります。明治二十八、九年の頃に、清沢満之師という方によつて唱えられた、当時の所謂、白川党の運動であります。私はその運動に参加して、非常な煩悶におちいり、遂に信仰に入つたものであります。

私はその動機と経緯とは、それよりこのかた長い三、四十年間というものは、常に絶えず世の人々に聴いて頂いて居るのであります。

その時、私は、最初は非常な理想論に立ち、我れ飽くまで善なりとして進んだのであります。が、最後において、その善たる、ただ相対的なものであつて、何等絶対的のものでないということを自覚するにおいて、非常な煩悶におちいつたのであります。それが私の信仰に入つた大なる動機でありました。

このことは皆様が、社会問題、経済問題、その他百般の問題に直面されたときに、御経験されるところの心理状態であつて、よく御経験のある方もおられることと存じます。

で先ずこの問題について私の経験いたしました事柄から告白いたして見たいと思います。

六

私共が現今の宗門、既成宗教を観まするとそこに大きな弊害のあることを、見るのであります。それらのことを此処で申上げたくはありませんが、現今の宗教界を見る時

そこには到るところに病根があります。信仰が地を払つて居るのであります。信仰の枯渇と共に、神聖なるべき宗教が、全部物質に支配され全然感化力を失つて、従つてまた社会が非常な腐敗状態にあることを見出すのであります。今の宗教界が然る如く、当時においても同様で、親鸞聖人のいわれた信念に従つて、生きている宗教家は何処にもない、というように痛感したのであります。

そこで斯ういうことではいけない、これを改革すべし、飽くまで腐敗を刷新すべし、——ということは、当時私一人が叫んだことではありません。心あるもののみな叫び、同感した処であります。

明治二十九年、三十年の頃、私は将に大学を出でんとする時でありました。私の先生、清沢満之師が盟主となつて白川党を立て、全国に呼号されたのであります。この時は私はまた学校に居りましたが、吾々同志は泣いて先生を促し、是非先生に立つて貰わねばならぬということを訴えたのであります。病軀を提げてまで、先生に蹶起して頂きたいことを切願したのであります。

私はジッとしては居られない。徒らに書物を読んで居るわけには行かない。自分が勉強するのも、研究するのも、要するに宗教界を刷新しようという精神に外ならない。宗教が腐敗し、衰えてしまわんとしているときに、便々と勉強して居つて何になる、というわけで遂に私は筆を抛つてこの改革に一身を投げ出したのであります。そうしてあらゆる苦難をし、闘つたのであります。長い間努力をしたのでありますが、その最後において如何なる現象が私の心に起つたか。

七

私は今も云つたように、宗教界革正のために、自分の身の犠牲になることをねがつたのであります。そこには何等の名誉も、報酬も顧みず、ただ宗教改革の理想に驀進したのであつたが——皆さまが、宗教問題でなしに、あらゆる百般の問題解決の理想のために献身的努力をいたされると同様であります。が、さてその最後においてはどうなつたか。最初の理想に到達し得たかどうか。

自分はこれ程までにするに拘らず、他の人は一向にさような心を持たない、われ関せず、というような態度であります。私が最も正しき主張なりと是認して、一生懸命になつても、他の人は認めてはくれない。

そうなると自分のすることが無駄になる、これでは駄目だ、残念だというような心が起つて参つたのであります。そうしてその考えがひどくなつた時には、四方八方、世の中なるものが甚だ面白くない。人は実際冷酷なものと思われ、遂に世の中を呪い、人生のすべてに疑いを持つてきた

のであります。是は気をつけて貰いたい問題であります。

八

私の最初の理想といえば、多くの他の理想家がいうように、自らを犠牲にし、名誉も、富も捨て、そうして温い心で敵を愛し、どこまでも悪しきものを憐み、いかに冷やかなものも自分の温き心で溶して見せる、敵とも手を握り合う、それまでやり逐げようというのが私の理想であつたのであります。このことは私ばかりではない。いやしくも精神運動をなす程の方は、すべて同じような考えをもつて進まれて居ると思うのであります。トルストイも云つて居るように「人生は無抵抗主義をもつて、平和を実現する」と、当時私は総てこの考えでやつて居つたのであります。

ところが、先程もいつたように、それが最後に至つて見れば、実際は、敵を愛して居るのでなく、呪つて居たのであります。人を恨んで居たのであります。自分の思惑が無視されて居ることを残念がつて居たのであります。

犠牲とは、自分が闇から闇に葬られても、更に不足を言わぬのが犠牲であります。が、最后に至つて、口からほとばしり出て来たものは不平であります、残念がりであります。自分が認められないのを残念がつて居るのであります。

そういうことに気がついて来たのであります。そうして逐に失望するに至つたのであります。絶対的なものとして考えて居たものが、然るに何ぞや、こういうような汚い心を持つて居つた、こういうような名誉心を持つて居つた、こういうような地獄の考えをもつて居つたのであります。

今日まで、我こそ正しきものなりと自負して居たが、いざ振りかえつて見れば、これは一つの空想に過ぎなかつたのであつた。矢張り自分は自分の主張が認められることを期待して居たのであつた。やはり名誉が欲しい、――そうしてそれ等が与えられることを期待して居たのである――

私はそこまで考え至つたとき、私の心は実に安らかでなかつたのであります。宗教家などというものは、口には殊勝なことを言つては居るが、直接、物質名誉というようなものとは性質の違つた――精神的に、吾々は正しいものであることを認めて貰いたいというような、一種違つた名誉心というもの、そういう卑劣な考えを持つているということを考えたのであります。恥しいことである、申訳ないことである。……

かつては本願寺の腐敗のみならず、宗教界の腐敗をなげき、革正を叫んだ自分が、実は自分自身が腐敗して居つたのである。自分自身が本当でない癖して、人のことをあれこれいうたは大なる間違いであつた、恥しいことであつた。

それにも拘らず、人は私を買いかぶつて大層立派なもの

と思つて居るのは、是は錯誤だ、買いかぶりである。――勿論それは人が悪いのでない、自分が全部悪いのだ、申訳ないことである。――斯くて私は非常な苦悶におちいつたのであります。

九

今日各方面において、社会問題或は思想問題、それらにたずさわる人達は、或は自分は正しいものである、絶対的なものであると考えて、恰も私が宗教改革を主張した時の心持と同じにあるのではなかろうか。――殊に今の若い人達、前途ある青年達が深く考える処なくして、つまらぬ運動に身を投じて居るのは、結局に於いて私と同じような道行きに終るであろうと思うのであります。

斯ういうように、自分のすることは正しい、善であると信じても、他からそれを正しい、善であると受入れてくれない。かえつて他は他で自分を正しいと考えて居るのであります。

世の中のことは、善とか悪とかが絶対的なものでなくして、五分五分であつて見れば、それでは人生のすべての問題を解決するとか、徹底するということは、決して出来ないことになつて参ります。

これは人生の問題の解決の上において根本的に考えねばならないことであると思うのであります。

一〇

ここに、私が今回お伺いしましたために、わざ〳〵用意して下された刷物がありますから、これによつて話して見ましよう。即ちこの中に聖徳太子十七憲法の文が出て居るのであります。

十に曰く。

忿（こころのいかり）を絶ち、瞋（おもてのいかり）を棄て、人の違（たが）えるを怒らざれ。

人皆心あり、心各執るところあり。彼是なるときは我非なり、我是なるときは彼非なり。我必ずしも聖に非ず、彼必ずしも愚に非ず、共に是れ凡夫（ただびと）のみ。是非の理（ことわり）誰か能く定むべけんや。相共に賢く愚かなること環（みみわ）の端なきが如し。

是を以て、彼人瞋（いか）ると雖も、かえつて我失（あやまち）を恐れよ。我独り得たりと雖も、衆に従つて同じく挙（おこな）え。

さすがに聖徳太子であらせられます。さきほどから私がいろ〳〵なことを申上げましたが、それはこの一言にして尽きているのであります。

斯くの如く人生なるものは五分々々であります。五分々

々である以上、そこに解決と徹底とはありませぬ。即ち今申されてあるように、我れ是、彼れ非。彼は又われ是、かれ非と、互に相対々立にて、そこにはすべての問題の解決はもたらせられないのであります。

それは小にしては家庭の問題、大にしては国家の問題、国際の問題、あらゆる社会の問題、みなこれなのであります。

して見ると如何なる大きな問題、たとえば国家、国際の問題、社会の問題にして、それを解決するという根本をつきつめれば、小なる家庭問題、個人の問題も同じことになつてしまうのであります。さればその根本の問題さえ解決すれば、あらゆる百般の問題は、わけなく解決出来るのであります。

次にはまた、

一に曰く。

和を以て貴しと為す、忤（さから）うなきを宗となす。人皆党（たむろ）あり、亦達（さとれ）る者すくなくなし。是を以て、或は君父に順ならず、たちまちに隣里に違（たが）う。然るに上和（やわら）ぎ、下睦（むつ）びて、事を論ずるに諧（かな）うときは、事理おのずからに通じて、何事か成らざらん。

人生はこの通りであります。

何人も平和を欲しないものはない、世界の平和、国家の平和、人間たるものみな和を欲するのであります。併し相対五分五分の心では、そこに平和はない、ただ争いがあるばかりである。

党を立てるということは、党とは、多人数よつて対立することであります。勿論一人々々あい対立して力んで居るのも党であります。

そういう党派根性では仕方がない。それは、真の平和、世界平和というようなことは望めないのであります。

一一

然らば如何にして解決するか。

この五分々々、相対の問題を解決すれば、人生のあらゆる問題は解決するのであります。

エジソンが電気や、電話や、ラジオなどを彼の一つの小さい研究所から発明したように、小さい根本の五分々々を解決すればあらゆるものは解決されるのであります。

すればこの五分々々をわれわれ内面の研究所において解決する工夫をしなければならぬ。そうしてもしこれを解決し得たらば、人類の幸福、国家の平和、世界の平和も持ち来たし得るのであります。

物理学のアインスタイン博士が、物質界に相対性原理を

主張したように、吾々精神界に於いても、斯くの如き相対性原理が成り立つているのであります。

しかして精神界においても斯く何処までも相対性である以上、そのまま行つては、何処まで行つても解決出来ようはないのであります。

さればこの我々の相対性をなおす——もうすこし実験的に言うならば、吾々の五分々々が悪いと覚つたならば、その五分々々をやめて、よくすることさえ出来ればよいのであります。即ち悪いところさえわかれば、正しい道に還えればよいわけであります。

が、先程いつたように、本来自分が正しいことをして居ると思つて居つた、それが相対五分々々であつたとなつたのであるから、この度はそれをよくしたと考えれば、それがまた、次ぎの相対五分々々となつて、斯くしてここで、如何にも解決の出来ようがなくなつてしまうのであります。

一二

そこで私が考えましたに、どうかしてこの相対的なものを絶対的なものにせねばならぬのであるが、果してそれが出来るか、何うか？

よく〳〵考えて見ると、私自身の中にも前申すが如く、もともと絶対的なものを持って、他の相対のものを同化せんとする心持はあつたのであります。即ち私の温き心をもつて外の人が冷やかなところがあろうとも、その冷やかさを、私の温き心を以て温くする。外の人の心を溶かしてしまう、という考えを持つて居たのであります。

然るにその私が、反対に、世間の冷き氷に出遭つて見たら、反対に感化せられ、冷くせられ、終に自分で温いと思うて居つた私の心が、凍えさせられてしまつて、却つて私が冷めたい氷そのものになつてしまつたのであります。

そうして、すでに冷い氷になつてしまつた以上、もう到底、他の人の冷い心を溶かすということは出来ないのみならず、冷い氷は他の人からいやがられ、呆れられ、逐には世を呪い、人を恨み、人を悪い方に引き入れる恐ろしき心になつてしまつたのであります。

斯くの如き私は、もう絶対に温い心を以て人を同化するなどとは思いもよらず、却つてそのような恐ろしき心をもつて人に対し、世に対し、益々冷い方へ引き入れようとするばかりである。

で、私は最後に思いましたに、もう私がかくの如く五分五分の心であつて見れば、到底救わるべき道はないと——

即ち、外のものに対して打ち解けたい、外のものと争わないようにしたい、愛したい、無抵抗にしたいと、様々なことを思いましたけれども、結局それは不可能なことであることを知るに至つたのであります。

す。

一五

私は第一回、山県内閣当時の宗教法案問題が終つて後に三年間程、西洋に行つて居りました。余り細いことは視察することは出来ませんでしたが、しかし西洋の百般の問題が現われて居るのを見るに、西洋の文化は闘争の世界であると見て来たのであります。飽くまで争いの世界であります。

その五分々々は彼等の経済上、政治上の問題に現われて居ります。国際上の問題でもそうであります。彼等の五分五分は東洋人の到底考えられない程の深いものがあると感じたのであります。勿論、西洋ばかりが五分々々で、東洋はそうではないとは云えませんが——兎に角、国家の問題社会問題、その他家庭の問題等に於いても、彼地では強く五分々々が現われて居ると感じたのであります。

私は決して西洋の宗教を悪く云うものではありません。慈善事業、或は社会施設等は、西洋の宗教は、実に至れりつくせりであります。そういうところは吾々仏教の到底及ばざるところでありますが、しかし今申した、人生としての根本義、人類としての平和の源、即ち吾々の相対五分々々の心を融かして、真実絶対安心の境まで導くということは、果して西洋の宗教で解決することが出来るかどうか。

もし解決する力があるならば、西洋の社会はもつと平和の気が現われて居つて然るべきものと考えるのであります。

私共が西洋に居りました時（明治三十三、四、五年頃）に、西洋ではすでに社会問題——社会主義、思想問題がさかんに唱えられて居りました。又国際関係も切迫して居りました。

私共が日本に帰つて後、是等西洋の思想が国際間の争闘となり、逐に世界大戦（第一次）となるまで、五分々々の思想は現われてまいり、逐に社会問題、経済問題を起こし、或は労働問題を起こし——逐に西洋の思想界の闘争になつて来たということは、その当時、私が西洋の宗教においてはその相対問題を解決するには、甚だ力薄いということを考えたのも、決して遇然ではなかつたということを思つたのであります。

しからば東洋人は過去において、この絶対を持つて居りこの絶対に育つているから、東洋人には五分五分は少ないかというと、少ないのが当然でありますが、残念ながらそうではない。私は思うのであります。聖徳太子が、万国の極宗と仰せられ得る尊い仏法僧の力を持つて居りながら、その光をば、日本国内にすら未だ十分明らかにする能わずいわんや世界の舞台においてこれを持出すことも出来ないと云うことは頗る残念なことと云わざるを得ないのであり

ます。

一六

私はつねにお話するのであります。皆様もお存じのことと思いますが、あの姥捨山の話であります。

自分の親が年をとつて、なんの役にも立たないからというので、不孝な子供が年寄つた親を籠に乗せ、奥山に捨てに行つたという話であります。その登つて行く道すがら、親は籠の中から手を出して、草を結び、枝を折り、頻りに道しるべを作つて行つた。不孝な息子はそれを見て、てつきり親は山から又戻つて来るつもりと思い、せせら笑いながら、あとから〳〵それを壊して行つたというのであります。

そうしてとうとと奥山に着いて、子供は親を籠から放り出し、さて帰ろうとすると、親は子供の袖をしつかりとらえ「お前はもう帰るか。もう会わんぞ、身体を大事にせよ。今来る道すがら、お前が道に迷おうかと案じて、草を結んで道しるべをして置いてやつたから、それを頼りに間違わないように帰れ」と。

子供はその親心の一言に接するなり、どう思つたか。さてはそうであつたか、あれは親が自分が帰えるための道しるべと思つて居たに、親捨ての自分を迷わせまいための、親の道しるべであつたか。

今までは親は有難いもので、子供に捨てられながら不足も言わず、親は黙つて捨てられて下さる位に横着に考えていたのが申しわけない。さてはそれ程までに親不孝の自分を思うて下されて、それを何処までも捨てざる思いがけないお心かと、ここに初めてひれ伏して今までの不孝の罪をわび、それより家に連れ帰つて、一代孝養をつくしたという話であります。

即ちこの意外なる親の心、この深い慈悲心が仏の大慈大悲であります。しかして一度この親心の深さを知らさるると、如何な親捨ての不孝者も、そのお慈悲の深きにはびつくりして、地に手を突いてあやまりはてずには居られぬ。仏のお慈悲はそれまでに、温め、とろかし、満足せしめずには措かれぬのであります。しかしてこれ実に人生秩序の根本となるところのものであります。

一七

私は御承知いただく如く、この数年来、大谷派本願寺革新を主張して、本願寺当局と闘つて居るものであります。それは本願寺当局者は、大谷派の宗憲、家憲に根本的に変革を加うる陰謀をたくましくしたのみならず、一昨年〈昭和五年〉前法主〈句仏上人〉の僧籍を剝奪して、親鸞聖

人以来の伝灯相承の宗体を破り、子として師父を追い、弟として兄を追い出し、弟子として師主を放逐したという、秩序破壊を敢行して、何等恥ずるところを知らぬのであります。

私はそれに絶対反対して、一日も早き秩序克服を叫んで居るのであります。幸にして私の主張は朝野を挙げて賛成して下された。犬養政友会総裁を初め、当県選出の中野、山崎の両代議士の如きも私の主張に賛成して下されたのであります。

私は全国の同志に訴え、文部省に訴願書を出して頂いた。その節は故浜口首相如きも直接私に面会して下されて、「これは自分個人としての意見であるが、当然文部省は本願寺に向つて取消しを命ずべきで、然かすれば本願寺当局は当然引退辞職すべきだ」と云われたぐらいであります。特に故山川健次郎男の如きは、最初よりこの問題について、非常に御心配下されたのであります。

斯く、いやしくも本願寺内部において、姥捨山以上のことが行われているということは、もつてその信仰が如何に徹底して居らないか、察するに余りあるのであります。

私がこういうことを言うと、それは君のも五分々々だといわれる方もあるかも知れませぬ。が、私は五分々々離れた絶対信念の立場から、正しき信仰を擁護せんがために、これだけのことは主張せずには居られぬのであります。私は正しき信仰を徹底させるためには、この問題に限らず、各般の宗教の問題に対して、あらゆる努力を払わねばならぬことを自覚して、三、四十年間常にこの種の主張をし続けて来て居るのであります。これが宗教の問題に対する、常に変らざる私の態度であります。

実はこの問題は今日申上げるつもりではなかつたのでありますが、ただ今日信仰の問題を説くにあたつて、唯南無阿弥陀仏々々々と念仏を唱えて有難がつていることが信仰ではない。真実の信仰は必ず実人生において、その建現が起つて来ねばならぬのである。しかして真の信仰に徹底の結果は、必ず人生の秩序となつて現われて来るものであることを云いたかつたから、つい口に出てしまつたのであります。

長らく御清聴を煩わしたことを深く感謝いたします

己上。

人生問題と信仰（二）

福島政雄

三、母性

これから阿闍世王の物語に入ります。阿闍世王が釈尊のみもとへまいろうとするその時までのことを申述べてみたいと思います。

私は始終感ずるところですが、阿闍世王が釈尊の膝もとへ行こうということになつたその阿闍世王を動かした力は何処にあるか、何が阿闍世王をそうさせたか、ということを考えるのであります。一口にその結論を申せば、阿闍世王を動かしたものは親心である。こういうことであります。その阿闍世王を動かした親心はどういうものであつたか。それについて何よりも先ず韋提希夫人が私の問題になるのであります。

韋提希夫人は御承知の通り、観無量寿経に現れているところでは、決して賢夫人ではないのでありまして、極めて愚痴の多い無智の一女性として現れております。私どもの愚痴は同じ事を繰り返し、巻き返し、かえらぬ事を繰り返す型であらわれるのでありますが、韋提希夫人がその通りであります。『自分はなぜ阿闍世のような非道の子を産んだであろう、釈尊の従弟にどうして提婆のような者が出来たのであろう。』とそんなことを繰り返し〳〵言つている愚痴の一女性であつた。その愚痴が仏の前に懺悔に転じ韋提希夫人が救われる一部始終が観無量寿経であります。

一たい仏教の経典の上で女性をどういう風に考えられてあるかと言えば、一面にはずいぶん悪く言つてある。女のことを仏典ほど悪く言つてあるものは他にないほどであります。『外面如菩薩内心如夜叉』ということも仏典に女の事として言われております。女とはそんなものとして見られています。或は『五障三徒の女人』とか、又これは男子を戒めた言葉であるが、『仮令大蛇を見るとも女人を見るべからず』と、或は『熱鉄をもつて眼中を刳るとも、散心をもつて女人を邪視してはならぬ。』とか、『女人は非常に罪悪の深いものである故に、魔王になることも仏になることも出来ぬ。』と言つて、女性に対してはこの上もないひどい言葉で痛烈に言つてあることが、仏典の至るところにあります。

しかし、そういうことばかりではなく、随分仏典の中に

は、女性を讃美してないが、母親を讃美してある。例えば、心地観経には母親の徳を十もあげてあります。母親の懐胎十ケ月の苦労を言葉を極めて書き現してあります。又勝鬘経には、勝鬘夫人が釈尊の御前において十大受三大願を立てられる。この勝鬘夫人は非常に偉い女性としてあらわされてあります。又華厳経には、善財童子がいろいろの善知識を訪ねて、真の道を求める面白い物語りがある。その五十三人が善知識のうちで、一番大事な地位にある善知識の中に女の人が幾人かある。殊にその最後に近い等覚の位に、仏に殆んど近い位に、摩耶夫人を現している。善財童子は釈尊御自身の求道心をあらわすものであるから、母親たる摩耶夫人は釈尊にとりて極めて大事な善知識であるということになるのであります。この華厳経においては女性の地位は、ずいぶん高い地位を与えてあるのであります。

そうすると結局仏典には矛盾があることになる。一方では女性をひどく悪く言い、一方では非常に高い位に置いてある。どちらが本当か疑問となるが、それに就いて私自身の解釈でありますが、こんなことを考えるのであります。仏典に於ける一番大事な問題は、女の善悪とか、そんな問題よりも、その中でも、賢夫人とか立派な母親とか言われるものは別として、一番愚痴の多い一番物のわからぬ無智の女人を救うことが、仏教の根本問題ではあるまいか。そうすると韋提希夫人の問題は非常に大事な問題である。愚痴無智の女性韋提希夫人が魂の底から救済される事は、やがて一切の女人の救済ということになるのである。こんなに私は感じているのであります。

それからひるがえつて考えてみますと、仏典の中に女性を悪く言うのに二つの意味があるようであります。一つは、男は女の誘惑にかかり易いから、特に釈尊の教団では厳しい戒律を守ることになつているのに、女に対する執着を起す者が多いのでありました。彼のカルダイなどは、一方では力がある人であつたが、女に対する煩悩が強い人であつた。その迦留陀夷などがひどい事をしたことが四分律などには細かに説いてあります。戒律を破つてひどい事をするものがあるので、釈尊はこれに対しては痛烈に誡を下された。女は恐ろしいものであるとして懇々として誡められたのも、そんな意味があると思います。

是は釈尊のお弟子だけの問題でなく、私自身の問題である。私が十六七歳頃から二十五六才までの間、私の母は毎日私に向つて、女は大へん恐ろしいものである。女ほど恐ろしいものはないと、毎日聞かせたものであつた。その時はそれ程言つても感じなかつたが、今日では、母親なればこそ子の性質がよくわかるものであると思う。ほかの子よりも一番私が心配な性質をもつている、これは今のうちによく教えて誡めておかねばならぬと、考えたのであろう。これは私の性格から考えられるのであります。釈尊の説法がそれと同じで男を誡めるために女を悪く言つてあるのであります。

それから、も一つはそんな意味でなく、これは女性の自覚を釈尊がうながされた、とこういうことであります。蓮如上人御文には、『末代の悪人女人たらんともがらは』と、悪人女人ということが並べてある。その悪人とは何を指すかと言えば男を指すのであろうと思う。女人は、その悪人女人のともがらはとある男の悪人に劣らぬ悪い心を持つた女、という意味であると思う。釈尊が女の事を非常に悪いように言われた釈尊のお言葉の中には、釈尊が一切衆生に対しこの御慈悲が、殊に女性に対して深かつたことが、そんなお言葉にあらわれたのであろうと思うのであります。

釈尊御自身は男性であるから、男としての自覚は深刻なものがある。その御自身の上から、自分は女ではないが仮りに女の立場にあれば、斯様々々の事は自覚することになるであろうと、いうことであります。つまり女性の自覚を促されたお言葉で、それは釈尊御自身の自覚から発するものであります。ただ女というものは我ままの者である、と無理押しに押しつけるのではない。それは仏教の本意ではないと思う。自覚の教が、仏教の根本である。その教を聴く一切の衆生は、男は男の立場から、女は女の立場から自覚に入ることが釈尊の本意である。それが仏教である。故に、釈尊が女のことを悪く言われることは、むしろ釈尊のお慈悲のお言葉であると思います。

私ども凡夫同志でも、自分がこの人とは親しく打ち解けたいと思う時は、ひどく当つて、悪い事は悪いと指摘して行く、その心持は相手の心と魂より打ち解けるところを求めることである。面と向つて相手の悪口を言つている時は、これと打ち融けたいと思つて云つているのであります。いま仏教で女性は悪いように言われてあることは、釈尊のお慈悲である。故に押しつけではなく、自覚を促し給うためのお言葉であります。

韋提希夫人は、何の賢いこともない愚かな愚痴の止まぬ女性である。その韋提希夫人が、どういうところに苦しんでいたかと申しますに、この世ほど苦しい厭なところはない。自分の子は、父を牢屋に幽閉し、自分を深宮に押し込める。実に、自分はどうしてこんなひどい子を産んだであろうか、と思うと、この世がいやで〳〵たまらない。それで釈尊に向つてこんないやな世界から離れて、どこか清浄なよいお浄土に生れさせてもらいたいと願つたのである。釈尊は光明を放つてその中に様々の浄土を示し給う

た。韋提希夫人は阿弥陀仏の極楽浄土に生れたいと願うたのである。

この観無量寿経の中で一番大事な所は、韋提希夫人の前に阿弥陀仏が出現したまう場面がある。お経ではこういう風に云わねば出来ないが、それは、つまり韋提希夫人の、その苦しい何とかして逃れたいと思う韋提希夫人の心の中に入り来つて、そんなに世を厭い逃げ出したい思つているその汝を、どこどこまでも哀れみ、悲しみ、哺(はぐく)み給う仏のお慈悲が韋提希に通じた、ということであります。それ故にお経には『仏心とは大慈悲是なり』とあります。阿弥陀仏の世界は、十万億土の向うではない。『此処を去ること遠からず』と云つてある。『去此不遠』とは、もう少し突込んで申しますと、汝のその苦しみ悲しみの心の中に仏陀の生命は入り満ちて、汝と共に苦しみ給うということを釈尊は明かにされたものであります。ここに韋提希夫人の心が開けて来たのであります。そうなると、今まで、早くこの世を逃れたいと思つた心が、苦しみの娑婆そのものにおちつくということになつた。苦しみがなくなつたのではない。苦しみの中に唯、仏の親心の徹底、お慈悲に融かされて安住してゆく境地が、韋提希夫人の心に開けて来て、早くこの世を去つてお浄土に行きたいという心がなくなるのであります。

教行信証では涅槃経梵行品(ぼんぎょうぼん)から引用せられて、阿世闍王が後悔の心を起しているところが述べられてある。父を獄中に押し込めて遂に殺してしまつた。これが阿闍世王の後悔の涙の種となり、非常に苦しみを感ずるのである。その心の感じが身体に現れ、身体中に臭い腫物が出来て痛み苦しむ心に悔熱を生ずとあつて、身体も心も痛み苦しめられるのであります。この時に韋提希夫人がどんな態度をとつたかが、これが大事なところであります。この時韋提希夫人は、様々の薬を作り阿闍世王の身に塗つてやつた。ただそれだけのことでありますが、これが以前の、愚痴の苦しみの心にせめられている韋提希夫人そのままであれば、阿闍世が苦しみはじめたとき、それみたか、お前はお前の父に対して一方ならぬ悪いことをした罪の酬いで、いまそんなに苦しむようになつてきたのだとせめたかもわからない。ところが、信心徹底した今の母は、阿闍世王の苦しむそれと共に苦しむ心をもつて、だまつてこれに薬を塗つてやつた。苦しみの中心の阿闍世王を目の前に置いて看護する韋提希の今の生活は、静かにその苦しみに従い、その苦しみを負うているのであります。

以前は仏の世界を向うに求めて、此処を去つて其処に往(ゆ)こうとしたのであつたが、今は仏の世界を自分の背に負つている。仏のお慈悲の光りに背中から照らされているので

ある。あの仏の世界に往きたいというのでなく、むしろ、その仏の光りの中に包まれて、苦しみの中に苦悩を感じつつ静かに随順の生活をしている。丁度子供が病気した時、母親としてなすべきことをしている、という平凡な生活であります。

説法する母でもなく、まして意趣返しをする母でもない。子供と一緒に苦しんでいる。そして薬を塗つてやつている、というと簡単なことのようであるが、私どもが一番煩悶して苦しむ場合は、自分のなすべき仕事におちつき得ないで苦しむものであります。

人生問題の解決はどこにあるかというに、特別な、神秘的な宗教的な体験を得ることではなくして、信仰的解決は、各々が自分の平凡な仕事に還る、というような境地で開けてくることであります。こんな処は早く逃れて、もつとよい世界に往こうなどと我ままな事を考えるのは間違いである。信仰生活はいろんな説明はいらない。教師は教師、農夫は農夫、商人は商人と、それぞれその苦しみの中におちついて往くということになつたのが、人生問題の解決であるのであります。つまり私共の最も平凡な生活に還つておちつくことであります。

信仰が信仰がと、特別のことのように騒ぎまわつて、自分の仕事はそつちのけにしていろいろ目に立つようなことを行つている。そんな表面的信仰はあやしいものである。それは自己の人生問題におちついているのとちがうのであります。狂熱的信仰であります。善導大師の仰せに、頭燃を払うが如くにして騒ぎ廻る如きは何の意味もないもので、虚仮の行、雑毒の善である、と言われてありますが、私は始終そう思うのであります。信仰の生活が人生問題の解決になるとは、息子をその父親に還し、娘をその母親に還すことである。これが人生問題の解決であつて、このほかには何ものもない。無自覚に、まつしぐらに突きすすんでいるものが振りかえつて、その父親、母親に還る、という平凡な事が成就するのである。つまり子供が親のもとにかえる、という平凡な問題であります。

阿闍世王の問題がそうであります。先ず直接には、韋提希夫人という母を通して阿闍世王に響くところの親心、久遠の絶対の親心がある。そこに、親の膝許に立ち還ろうとなつてくることであります。母の韋提希夫人の方は、汝の親の所へ還らなければいけないなどと説法するのではなく、自分は自分で親の許へかえろうとして、唯黙つて子供の看病をしている。それによつて子供には親心が響くのである。黙々としているその母の胸を通して、阿闍世王に親心が響いてくるのであります。

四、親心

この時、そこに小細工をしようとするものが五六人も出て屁理屈を言うのである。阿闍世王は、五逆罪をおかせば生きながら地獄に堕ちると聞いて、自分は今にも地獄におちるのであろうと苦しんでいる。そこに次々と大臣が出て来てはいろ〳〵な理屈を述べて慰めようとするのであります。一人は曰く『大王は地獄におちると苦しんで居られるが、そんな地獄なんかありません。誰かその地獄を見て来たものがありますか、誰もないでしょう。それは地獄はないからであります。私の先生に非常な名医があつて、その先生は――一体、業報などあるわけのものではない。あるように考えるのが間違いである。黒業なければ黒業の報はない、白業なければ白業の報もない。黒業白業の報いは決してあるものではない、と説いております』と言つて慰めるのである。

又、或る一人の家来が来た時、阿闍世王は『自分は体も心も痛んで苦しむ。自分は癡盲であつて悪友に近づき、正しい道の父親を殺した。父親母親仏弟子に対して悪業を起したならば、必ず阿鼻地獄に堕ちると聞いているので、自分は今こんなに苦しみ悩んでいる。これを救療する医者はなかろう』と痛切な悩みを訴えるのである。すると大臣は『一たい、出家の法と王法とは違うのであつて、出家は一匹の蟻を殺しても罪になるが、王法では、一国の王は父親母親を殺しても罪にはならぬ。故に王法と出家の法と区別してお考えにならねばなりません』というのである。それでも阿闍世王は肯くことが出来ないのである。

又次の大臣が出てたずねると、阿闍世王は前のように自分の苦しみを云つて訴えるのである。『わが父は非常に情深いお方であつた。うらないしが自分を占つて、この子は生れて後大きくなつたならば父を殺す、と言つた。しかるに父はその、私を育てて下さつたのである。それに私は、その情深い父を殺してしまつた。こんなものは阿鼻地獄に堕ちるにきまつている。自分はこんなに苦しんでいるのである』と云えば、その大臣は『人間には前世の悪業の余りがあります。前世の余業で生死をうける事になるのであります。御父上ビンバシャラ王も、前の世の余業でこの世を終つたのであるから大王の罪ではないのであります』

斯く次から次へすすめて、理屈で阿闍世王を慰めようとするのであります。ある大臣の如きは非常に理屈を述べる。

『一たい地獄々々と云われるが、その地獄の説明を致しましょう。地とは大地である。獄は破るという意味である。故に地獄とは、地獄を破ることであつて、つまり地獄というものは無いことになるのである。罪報はないのである。又、地は人間の人、獄は天上界の天の意で、父を殺した為に、人間や天上界に生れる果報をうけることになるのであります。羊を殺して羊界に生れ、人間を殺せば人間や天上界に生れることを聞いております。又地獄の地は命、獄は長いという意味で、殺すことによつて命長くこの世に生活することになる。大王よ。決して大王の言われるような地獄はないのである。麦の種をまけば麦が生ずる。稲をうえれば米が生ずる。人を殺したら人に生れる。というようなものであります』とて、阿闍世王を理屈で慰めようとする。併し阿闍世王は理屈で慰められないのである。理屈では阿闍世王は少しも落ちつかないのであります。

今一人の大臣は『一たい殺すということは、本当に罪があるのであろうか、斧が樹をきつても斧に罪はない、鎌が草をきるが鎌に罪はない、刀が人を殺しても刀に罪はない、毒を以て殺しても毒に罪はない、一切万物決して罪はない、斧が木をきつたからとて、鎌が草をきつたからとて、斧にも鎌にも罪がないように、大王にはちよつとも罪は無いではありませんか』と理屈ずくめに落ちつかせようとするが、阿闍世王は少しも落ちつくことが出来ないのであります。

これは印度三千年前の物語でありますが、この大臣たちが阿闍世王に云つていることは、そのままに今日の人が云つていることである。何か人が苦しんでいる時は、理屈でもつて慰めようとする。何とかして人生問題の悩みを理屈で誤魔化そうと私どもはしているのである。併し、人生問題そのものの苦しみは、理屈でどうにもなるものではない。理屈を聞けば益々苦しみは深くなつてゆくばかりであります。つまり私どもの人生問題の苦しみが大きくなれば、哲学などでその苦しみが解けるものではない。西洋の哲学、仏教の哲理、唯識論や華厳、天台の教理などで、身につまされる人生問題が解けるものではないのであります。そうするとこの問題はどこから解けるか――ここにいよ〳〵最後にあらわれましたのは、ギバ大臣であります。

ギバは『大王、あなたは安眠ができますか』とたずねる。すると阿闍世王は『ギバよ。自分の病気は非常に重い。法の如く国を始めた正しい我が父を、横さまに逆害したから、どんな良医でも、どんな妙薬でも、どんな呪術でも、自分のこの病気は本復はむつかしいと思う。昔、賢い人からこんなことを聞いた――その人の身と口と意とに悪業を作れば、その人は必ず地獄におちると、自分は今、どうなつてゆくかを考えるとき、どんなに慰められても安眠することとは出来ない。これを治す何ものもないであろう』と訴えるのであります。

その時ギバは『善い哉、善い哉』と大王を賞める、そし

て『大王は罪をおつくりになつた。それは仕方がない。しかし、今大王の心には、非常な後悔と慚愧の心をお起しになつて居られます。諸仏世尊はここに、二つの正しい道があつて、これで一切衆生は助かるのであると云われております。それは一には慚であり、二には愧である。慚は自ら罪をつくらない。愧は人に罪をつくらせない。慚は自己に恥じ、愧は世間に恥じる。慚は人に恥じ、愧は天に恥ず、これを慚愧と言い、無慚愧は人ではない畜生であると。この慚愧が人間に一番大切である。大王は今、この慚愧の心を起して居られます。大王は、この病気を治す人はないと云われますが、この病気を治す唯一人のお方がある。カピラ城の浄飯王の子悉達多太子は覚りを開かれて居ります。この仏世尊のお力によつて必ず大王は救われ給うでありましよう』と言つて、ギバが釈尊の御許に参られるように勧めておる時、天上より声が響いて『自分は今汝を愍むが故に勧めて導くのである』と云う。ギバは仏世尊よりほかに大王を救う人は無いと説き、空からは、汝を愍むからその道を勧めるのであると喚ぶ。阿闍世は非常に怖れぶるぶる慄えて、空から聞ゆる声は一たいどういう声か、誰の声であるかとたずねると又空から声が響いて『我は汝の父ビンバシヤラである。汝はギバの云うことを聞けよ。邪怪な他の臣下の云うことを聞くな』と。ここに阿闍世王は悶絶して地に倒れるのである。

私は、これは非常に味い深いことであると感じて居るのであります。

空中から声が響いて来たということは、これは父ビンバシヤラの生前の教が、始めて阿闍世王に響いたことであります。母親から静かに看護されている阿闍世王の胸に、あり〳〵と父の世にあつたさまがはつきり甦つてきたのである。外からは母の看護、内からは父の声が響いて、始めて釈尊の膝許へ往こうとなるのであります。もう一歩突込んで申しますと、この世を去つた父親、此の世にあつて黙つて看護して呉れる母親に促されて、阿闍世王が、釈尊の許に行こうというのは、阿闍世王にこの時既に久遠の声が聞こえて来た、ということになるのであります。

これは単に阿闍世王の問題ではない。私自身にそんな事を感ずるのであります。両親がこの世に在つた頃は、しきりに父親にたてつき、毒矢を向けて来たのである。私が家を持とうとした時、母は非常に心配して東京まで来て一心に世話をしてくれるのでありました。私は有難くない事はないが、一向に感謝しないのでありました。久しぶりに遙々と母親が来たのであるから、嬉しいにはちがいないが、何かと隔て心があつてうちとけない。自分自身でも満足しないし、といつて、友人にもあまりうちとけて話すこ

とも出来ず、いい加減なことを話しているのである。或る日、夜遅く帰つて、仏壇に灯明をあげてその前に座して大無量寿経の五悪段を開いてみたのである。そこにはこんなことが書かれてありました——この世の中にわからぬ人間がおる。それは大へんな怠けもので、自分の仕事ははげまない。その眷属は飢え凍える有様である。父母は見るに見かねて、もう少し家業に立ちかえつてはどうか、と意見すると、その子は眼をむき出して恐つて、口答えをする。故に生みの親子でありながら仇同志のようで、こんな子は無い方がよいと思うようになるのである、——と。その時私はそれを見て、これはたしかに私のことであると感じたのでありました。

『善人は善い事を行つて明るい世界から明るい世界に行く。悪人は悪い事を行つて暗い世界から暗い世界に行く。誰も知らないであろうが、仏のみはこれをよくしろしめすのである』と云う。これを読んで、これは私の事を書いてあると感じて仏前に泣き伏したのであります。其の時から自分の心が開けはじめたのである。今日はこれを考えますれば、母はこの子を何とかして正しい道に生きさせようと、熊本から東京まではるばる三百里を上つて来て私と一緒に苦しんでいてくれたのである。私が淋しそうにしていると、どこどこまでも理解してやりたいと、黙つて誠をつくしてついて来て呉れたものである。五十五年間の母の生活を今から顧るに、その時の私は一種の阿闍世王であり、母は韋提希夫人であつた。苦しみの中に子に対する務めを沈黙裡に果しているその真実心は、今既に母が此の世に無い時に振りかえつてみれば、その母を通しての久遠の御親のまことであつた。私は生きた仏の説法を聞かされたのである。空な仏ではない。活きたまことに生かされはぐくまれている。私と一緒に悲しみ、私が迷えば共に迷い、共にいて下さる広大無辺の御慈悲が私の上に生きている親を通して響いてくるのであります。

それではお前は、いつもそんなに親のお慈悲を感じているか、と云われれば、私はかねては念仏を申さず、親をも思わない。そのような私をどこ〳〵までも愍んで、久遠の親心のまことはその私の生命と一つになつて、私の生命の上に徹して下さるのであります。

韋提希夫人が、空中からきこゆる父親の声を聞いて悶絶する阿闍世王を見て、静かに薬を塗つているのは、三千年昔の他所の問題でなく、私の身の上の問題である。母は、つねにこの私の生命と一つになつて動いているのであります。どこ〳〵までも私を理解し、私の生命と一つになつて生きているので、それは説法する母でなく、共に苦しみ共に悲しむその親の血の涙の苦しみを通して、そこに、私の

生かされる御恩をいただくのであります。

五、親子一如

私はこういう風に宗教上のお話を致しておりますと、その時の調子に乗りまして、自分の境涯でもないような事を申してしまう。こういう事が始終ありまして、自分はあの時はあんな事を云つているが、又あの時はあんな立派な事を申したが、自分の境涯というものは決してこういうところに行つておらない、と後で後悔をするのであります。つまり、自分をごまかし、お集りの人をごまかしていると云う感をいだく事が多いのであります。

今日は午後から阿闍世王の事を述べております。昨晩申した事と関係のある事でありますが、一体阿闍世王というようなそういう風の立場、そういう風な処に、そういう風な性格に、自分というものが少しでも通う所があるのかどうかと考えさせられるのであります。

今日の昼は私の母親のことを申上げましたが、実は阿闍世王の事については私の父親の思い出が深いのであります。丁度大正十四年の始め、もう三四ケ月後には日本を後に旅立つて、西洋に参ろうという頃、父親の病気が段々重くなり、入院して、病床に呻吟しておりましたが、どうも寿命がありそうにもない。この有様ではむづかしと思つた。その時私自身がどんな事を考えて居つたかというと、実に言語道断な事を考えて居つたのであります。『どうも父親の病気は恢復しそうにもない。自分は二三ケ月後には西洋に向つて旅立とうとしているが、どうせ父親の寿命はないものならば、自分が西洋に旅立つた後でなくなるようでは実に困る。どうせ寿命のないものなら旅立つ前に死に目に遇い度いものである。どうせない寿命なら旅立つ前になくなつた方がよい。』と云うような事を考えて居つた。これは非常に冷たい考えであり、冷たい恐ろしい心持である。

そんな冷たい心持を持つているから、父は病人であり、神経が鋭敏で感傷的である、すぐそれを感ずるのでした。私が病気を見舞いますと父はこういう風な事を云う……『どうも政雄は俺の病気の事は少しも心にかけてくれない』と。それは私の急所に触れた言葉である。実際自分の父の病気を気にかけていないと云うことを父から云われると、急所に触れられて痛いものだから申訳をしたくなる。その申訳に全く反対の事を云う。「いいえ、気にかけていないのではありません。私は気にかけております。随分お父さんの病気を気にかけて居ります」と申すのでありました。今から考えてみると実に空虚な申訳でありました。

その時、私がほんとに「お父さんの云われる通り、お父

さんの病気を少しも心にかけていない不孝な子でありました」と云つたならばまだしも素直な子でありましたでしょうに、私はその反対でありました。

「私は少しも容態を心にかけていないのです」と云えなかつたのである。空虚な言葉を口走つていたのであります。そのうちに段々悪くなりまして私が旅立つ二ケ月前に遂に父はなくなつてしまいました。

そうなると、一たい自分は父親をどんな待遇をして居つたかと考えずに居られない。色々考えます時、形式は違つても、阿闍世王がビンバシヤラ王を獄中に幽閉して獄死させたという、それと丁度似通つたことをして居るのである。父はひどい神経通で、床の上を少しも動くことが出来なかつたので、つまり父を獄中に押込めているような事をして居る。その獄中に押込めた父に対して、自分は冷たい心持を以て接している。それは阿闍世王と五十歩百歩の有様である、と段々思つて来ました。

船が印度洋にさしかかつた時、しきりに三千年前の阿闍世王と今の私とがよく似通つたような心の道を辿つているのであると思つた。阿闍世王の問題は他事ではない。今の自分の問題である、と、しきりに思つたものである。

ところが又一方ではこういう風の感じがある。これはある人からの打明話を聞いたのでありますが、親に対する感じは、自分は親に背き叛いている現実の有様である、その親に叛き叛いている自分に気がつけばつくほど、同時に、この叛き叛いている自分を、親なればこそ自分のような者を胸に蔵めて下さるものであると云う感じがするものだ、と、尊敬する人から聞かされた。その感じが私の心の中に往来するのであります。結局自分は阿闍世王と五十歩百歩で、親に対して散々冷たい心を差向けた。私は阿闍世王と同じだという感じと、その冷たい私というものを、親の方からはどこ〳〵迄もその御胸の中におさめて下さつたものである、と、こういう二つの感が私の胸に入りみだれていたのである。

ところが、斯うなつてくると、私の心持が煮えきらぬ中途半端でありました。つまり親に対して甘えるという心持である。自分は親に対して冷たい心、冷たい態度を持ち続けて来たが、親は有難いもので冷たい心の持主である子供を見捨てず、親の方はこの冷たい自分を胸に蔵めて呉れるのである、という。こんな煮えきらない中途半端な心持であります。

昔、私が近角先生から繰返して聞かされたお話がある。それは、此処に一人の放蕩息子がある。今料理屋で芸者などをあげて遊び騒いで酒に浸つている。親に背いて放蕩耽溺の生活をしている。そして「親は有難いもので、自分はこんな

放蕩三味な生活をしているが親は自分に毎月毎月この放蕩の費用を送つてくれる、親は有難いものである」と言つている。こんな事を言うその放蕩息子に親の心が届いているのであろうか。それは親心が届いていないのである。それは子の方の甘え心に過ぎぬのである。親心が届いたとはそうではないと近角先生はお話下さつた。こんな放蕩息子にどうして親の心が届くであろうか、親心の届くということはつまり如何なることか。

近角先生は、子は甘え心で考えているが、親の心というものは決してそんなことではないと言われました。親の心の届くというのは、その放蕩する息子の処へ、親の手紙を持つて、二人の真面目な友が訪ねて来て親の手紙を届ける。『お前はこんな放蕩をして、親というものは有難い、こんな奴に、と云つているが、今自分が親の心を届けてやる受取るがよい。親の心は若し金を送つてやらねば、お前はどんな事をしでかすかわからない。若し金を届けねばどんな事になるかも知れない。ひよつとして盗みでもしては……と、親は郷里から心配して、血のにじむ金を送つているのである。乱れて行くお前を親は見て居られず、血の涙の金を送つているのである。乱れている我が子の上が哀れで哀れでたまらぬ。見捨てようとしても見捨てられぬのである。お前の放蕩三味の生活が親の血の涙で支えられているのである。この親の手紙を見よ。』

と云つて細々と書いてある父の手紙を見せる。その言葉を聞き、手紙を読んで見ると、此の時始めて親の心に気がつく。さては自分がこんな放蕩三味をつくしているなかにも、親はどこ〳〵までも放蕩する自分を見捨てず、親は苦しみの心を以て自分の苦しみと一つになり、一緒になつて苦しみの生活をして居られたのであつたと、初めて慚愧の心が放蕩息子に起る。これが親心の届いた姿であると、それを繰返し〳〵近角先生が私にお話し下さつた事を思い起すのであります。

私が父を失つて、今のような事を考えながら印度洋の波の上を渡つて行く時の心持は、丁度放蕩息子が親の金を費いながら、親は有難いものだとの親の、偶像をえがいているのと一つも違いなかつた。同じ事であると今思うのであります。つまり自分は親と一つになつていないという有様であつた。

その証拠はどこにあるかと云うに、四十日の船の旅の間夢を見る。その夢はみんな父の臨終の夢ばかりであつたのである。西洋に着いても屢々父の臨終の夢をみるのであつた。

浅はかに考えると、父の臨終の夢を見るのは、如何にも親孝行のように考えられるが、そんな夢を見るのは実は、

自分は親と離れ〳〵であつたということになるのである。親を向うに見ていたのである。親は斯様々々であろうと考えてみるのである。私は父を失つてから七年余りというものは、父の幽霊がついていては現れて見える。親の幽霊につかれていたのであつたかと思うのである。こんな親の幽霊がつきまとつている有様は一種の幻の生活である。

問題は、親の幻がつきまとつて居るのではなく、幽霊につかれて居る処から飛び離れて、自分と親とがしつくりなつた一緒の生活に来なければ宗教の世界ではないのである。

いよ〳〵親と子と一つになると云うのは、親と子と云う間隙はなくなつて、親だ〳〵とさえも云わなくなるのである。それは斯うである。それは永い間親の幽霊につきまとわれていた私が、最後に親の幽霊から放れることになりましたのは、自分の心の中に動く親への甘え心、即ち自分は親に対する甘え心ばかりで動いていることに気がつき始めてから、切めて一筋の親心、唯一筋の親心がすべての働きとなつて表れ、その親心の中に動かされて行くことに気がついて参りましたわけであります。

親と子という問題は、親子が対立しているとか対面しているのではなく、子が親の中にある、つまり子が親に対して「お父さん、なつかしい」と云うのではまだ〳〵余裕がある。懐しいとか、有難いとかの言葉を挿む余地のない親の心の中に於ける我が生命の動きという事になるのである。

或る人は自分の子供に対して一言一言に就いて、親に対して有難う御座いましたと言わせようとする人もあります。現に私の子供もそんな先生のお話を聞いて、或る日のこと私の前にあらたまつて、「お父さん有難う御座います」と、こんな事を申した事がある。子供から改つて有難うと云われると、私のような者は、いかにも親子の間にへだてが出来たような感じがします。親子の間に有難うも云わない、間髪を入れない、しつくりした間柄である。有難うと、殊更に入れるところに親と子の間に割れ目が出来ているのである。

是は少し切り込んだ問題になりますが、私ども浄土真宗のお話を聞かされ、親鸞聖人の教の道を辿る者が教えられる事は、真宗の教義により、お念仏は、言わば子供が親に対して有難う御座いますと云うような感謝の声であり、報謝の念仏であると教えられるのであります。実際そうだ、その通りだとは思いますが、併し、若しも、私が今更らしく事だてて報謝の念仏を営んで居りますと考える事はどうでありましようか、それは報謝の念仏とは云いながら、他人行儀の念仏になつているのではあるまいか、念仏申しな

がら隔つて居るのであります。

念仏はどこ〳〵迄も親心唯一つの御働きである。私が久遠の御親に対して報謝する考えの念仏でなく、どこ〳〵迄も親の働きで、親の命から出て私のいのちに響く声であります。その時、私の方から云えば、有難うとさえも思つていない。そこに親心唯一つが働いて、その親心の中に私が動いている、とこう云う事であります。

六、無根の信

今は阿闍世王の事を問題にして居るのでありますが、阿闍世王が釈尊の膝下に参つて教を聴こうと云う心を起したことが既に親心のはたらきを以て之を成就せられたのであります。親心唯一つが働いて阿闍世王の聞信といういのちの働きが始つたのであります。で親の方から云えば阿闍世王唯一人に向つて一すじに注がれる親心である。同時にそれが一切衆生に注がれる親心である。阿闍世王一人が親心に眠が醒めると云うことは、一切の衆生が親心に目醒める最初の縁である。ということになるのである。

釈尊が今や、娑羅双樹の蔭で、まさに涅槃に入られんとする時、やがて此の世を去りたまわんとする釈尊のお心の中にどんな心が動いたか。『為阿闍世王不入涅槃』即ち阿闍世王一人の為に涅槃に入らずとのお心が動いている。阿闍世王が苦しんでいるのを見捨てて涅槃には這入れないとのお心である。阿闍世王が悶絶して地に倒れて苦しんでいる。その苦しみと一緒に苦しむという親心の動きである。自分も共に苦しむ親のいのちである。そしてその阿闍世王は一切衆生の代表者であり、阿闍世王の苦しみ一切衆生の苦しみであります。

そこで、お経の上では月愛三昧と云われてある、釈尊がその月愛三昧に入られる。その有様は、丁度月の光が照らして、暑かつた昼間の暑熱は何処かへ去つて、月の光に涼しく照らされる、世界が月光に輝いている、という有様である。

今阿闍世王の煩悩の熱の荒れ狂うて居る中に、阿闍世王と一緒に苦しんで行くと云う釈尊の大慈悲心が阿闍世王の身心に触れて、そこに一つの涼しい世界が現れて来る。これは阿闍世王の生命の体験が、かかる方法で譬喩的に表現されてあるのである。ここに阿闍世王は忽ちのうちに、臭い、痛い腫物の身体の痛みがよくなり、立つて釈尊の御許に参る。

釈尊に参つて阿闍世王は釈尊からどういう事を聞くかと云えば、釈尊が阿闍世王に対して仰せらるる事は、不思議な事には、前の耆婆を除く以外の六人の臣下達が申した理屈と、あまり違わぬ事を仰せらるるのである。それはこんな事であつた。

『汝の父ビンバシャラは徳の高い人であつた。が前世の業によつてあんな事になつた。それで、お前が父を獄死させる事になつたのである。阿闍世よ、汝は決して獄屋の番人に父を殺せとは云わなかつたであろう。ただ足を削れと云つたのみであろう。若し汝が早く首を斬れ、殺せよと云えば直ぐに成就したのであろうが、首を斬れと云つたのではない。だから結局阿闍世よ。お前には罪はないのである』と。

前に或る大臣が云つた「鎌が草を切つても鎌に罪はない。斧が木を伐つても斧に罪はない。毒が人を殺しても毒に罪はない。」と同じような事を釈尊は阿闍世王に云われる。どこが違うか。何が違うかが問題である。

釈尊は更に立ち入つて斯う仰せられる。

『若し、阿闍世よ。お前に罪があらば諸仏世尊にも亦罪がある。昔、ビンバシャラが諸仏世尊に供養をした。もと〳〵ビンバシャラが諸仏世尊を供養した事によつて、それから因縁が結ばれて汝阿闍世がこの世に生れ出る事にもなつた故に、若し、昔、諸仏世尊がビンバシャラの供養を受けることがなかつたならば、お前は人間に生れて来なかつたであろう。お前が生れなかつたら、父を殺す罪も犯さなかつたであろう。故にその罪は諸仏世尊の罪である、即ちその罪は我に在る』と釈尊は仰せられた。罪は阿世にはない、若し罪あらば諸仏世尊にある、我にある、と云われる。そこで、前の大臣達の云つた言葉と何処が違うかがはつきりしてくるわけである。釈尊の親としてのお心の中に、悪逆の阿闍世王の罪の一切がおさめられて居る、阿闍世王の全体が釈尊御自身のいのちそのものとしてそこにとり入れられてある。阿闍世王が罪を犯した事が自分が罪を犯した事になると云われる、共に一つになつて苦しむ偉大な同情と云うか慈愛と云うか、もとより是は同情と云つても足らず、慈愛とも云い尽くされぬ。釈尊が阿闍世王と一つになつて、同じにどこ〳〵までも苦しんで行かれる、阿闍世王のいのちが釈尊のいのちか、釈尊のいのちが阿闍世王のいのちか、こういう事になつているのである。

聞く阿闍世王の方では、その響がまるで違つて来る。釈尊のお言葉が、唯しみ〴〵と身に染みてくる或る何物かを感ずるのである。親の慈愛とか同情とかでなく、そんな対立したものでなく、もつと踏み込んで、いのちといのちが一つになつて居ることをしみ〴〵感ずるのである。

そうなると、阿闍世王では、以前とはずつと心持が変つてくる。今迄の自分は、自分の犯した罪のために未来永劫生き乍ら地獄に落ちて苦しまねばならぬ、恐ろしい地獄に落ちたくないと苦にして居たのが、釈尊のお言葉を聞くと仮令自分は未来永劫阿鼻地獄の中に苦しみ沈んでも、決して私はいといません、と云うことになつたのである。一切

衆生のために地獄に落ちて苦しむとも、むしろ甘んじて苦しみを受けると云うように心持が変つて来たのである。

今の今まで地獄を非常に恐れた阿闍世王が、地獄の穴の中に安住する阿闍世王となる。そうすると阿闍世王は不思議になつてくるのである。どうしてこんなことになつたか。実にこれは不思議である。考えて見てもわからない、理屈でもわからない、今の今まで心に恐ろしかつた地獄が恐ろしくなくなつて、その苦しみの中に安住する気持の生れたことを不思議に感ずるのである。そこで阿闍世王が釈尊に向つて申されるに、

『私は予ねて伊蘭と言う臭い毒の実を植えられれば悪臭の伊蘭の木が生え、栴檀を植えれば栴檀の木がかんばしく生えると聞いて居りますが、今此の不思議は、伊蘭の実を植えて栴檀の芽が生じたような不思議を感ずるのであります。伊蘭の実は私自身であり、栴檀の芽は私のこころの信、即ち私の信は無根の信であると感ずるのであります』と申されたのであります。

此処に阿闍世王の申された無根の信と云うのが非常に有難い。我々は常に信念などと云う事を考え、信念をつかんだならば、その信念によつてどこ〳〵までも根強く、如何な嵐にも地震にも決して倒れることなく打勝つて、その信念で突き進んで行く。その信に根強く自分のいのちを打ち建てる、それが信念の確立である、と云うような事を考えがちであるが今阿闍世王は、自分の信は無根の信である。自分に根があつて立つたのではない。自分はこれという根のなくして生えた信なき信である。無根の信とは、信なき信と云うことである、と云われているのである。

自分は今こそ信念を摑んだと云うような事でなく、自分は根本から阿鼻地獄に堕ち込む身である。それを自分がどうにも遮り得ないで、しかも甘んじて堕ち込んで行くのである。若し自分に信念と云うようなものを持つて居り、何ものか、自分にとりどころがあればそんなことにもならず、一種の英雄的になるが、自分自身が無根の信であると云うことが今始めて解つた。無根の信は、自分に是れ是れの善い所があつて芽生えた信でなく、どこにもとりどころのない自分に不思議に栴檀の芽が生え出たと言う有様であります。

此処は仏教の上で非常に肝腎な問題であります。

私には根本の我執がある。その根本の我執は私が私の心に意識して居るより根深いものである。無意識のうちに動いて居る、私が寝て居つても、無意識の世界にある根本の我執は止むことがない。私のいのちそのものが我執である。その根本の我執はどんな風に現れるかと云うに、

「今こそは信仰を得た、これで大丈夫だ、人生問題は片つ

端から解決が出来る、」と云うのは、これは信仰と云う美しい仮面に根本の我執が働いているものである。私の我執は凡ゆる仮面のもとに現れる。信仰という仮面のもとに、人格の上に、色んな方面に現れる。慢心とか虚栄とか人格の姿の上にも我執が現れる。自分はまんざら捨てたものではないなどと我執が現れる。そしてそれが美しい姿となつて現れてくる。

自分があの人に対して斯様々々の親切を尽しておいたと思う時に、その人に対しては、親切は仮面であり、私の我執である。親切のもとに我執が現れているのである。私のいのちの動きは、どんなに美しく動いても、それはみんな我執の変形の動きであります。

私が人に対して「貴方は実に恩も知らぬ冷い人である」と云うたとする。それは如何にも自分は正しいものだとの考えのもとに相手を責めている正々堂々たる戦の如くであるが、そんな忘恩と云うことで人を責めるのは、実は、自分がまさかの場合には恩を人に売りつけたいと云う心がそんな形で現れているのである。忘恩で人を責める我執である。それを自分は正しい事の為に争うているかの如く思つているのであるが、つまり自分の利害関係の為に恩というものを売出しているのである、つまりどちらに行つても結局我執を離れない自己であります。

「或る信念を得た」といつても、それは一つの我執となつているのである。「善き行いを為し遂げた」と思う時、それが我執となつているのである。結局私の落着き処は凡て自分の我執である。すべてが自分の我執である、と、自分の相をみせつけられる処に落ちて行くのである。そこで阿闍世王の申された無根の信ということになつているのであります。

そこで阿闍世王は深く省みて考えるに、「実に不思議である、自分のこの無根の信は何処から来たのであろう」と、つく〳〵考え乍ら、釈尊の前に長い告白をするのである。その中に

『如来は一切の為に、つねに慈父母となり給えり。まさに知るべし、もろ〳〵の衆生は、みなこれ如来の子なり。世尊、大慈悲にして、衆の為に苦行を修したまう。人の鬼魅に著わされて狂乱して所為多きが如し』

と申されて居る。無根の信の出所である『世尊大慈悲にして衆の為に苦行を修し給う』即ち世尊の大慈悲は、如何なる姿で現れるであろうかと言うに、世尊は遠くに居つて、人々が苦しむのを向うから眺めて「苦しんでいる、気の毒だ、可哀そうだ」と涙を流して同情して下さるようなものではない。『世尊の大慈悲は、一切衆生のために、一切衆生の若行を若行したまうものである』と、世尊は斯ういう

風に苦しみ悩み給うのである、一切衆生が苦行しているから自身も苦行すると云うような間隙のある対立的なものではなく、私が狂い乱るれば私と共に狂い乱れたまう、私のいのちと共に狂い乱れ給うて下さるのである、一切衆生の苦しみが、そのまま世尊の苦しみである、世尊の苦しみはそのまま一切衆生の苦しみである、と、永々と阿闍世王は釈尊に告白したのであります。

世尊の苦しみの有様は、衆生が狂い乱るれば、衆生の狂い乱れるいのちの中に入りみちて、一つになつて共に狂い乱れるのである。その苦しみというものは、阿闍世王が父を殺して苦しんで来たその阿闍世王のいのちと一つになり、阿闍世王と一緒に苦しみ悶えたまうのである、それが私のいのちの中に一つになつて、私の狂乱と一つになつて、私のいのちと共に狂い乱れ給う、そこに如来のいのちを感ずるのである、私のいのちの上にしみじみと感ぜられるのである。

是は徹頭徹尾親心の働きで、阿闍世王のいのちにまといつき、阿闍世王と共にどこ〳〵迄も一つに動くのである。阿闍世王が地獄に落ちれば王と共に落ちて一緒に苦しんで下さる親心の働きが、自分の心の動きの上に感ぜられて来ているのである、この親のいのちが、自分のいのちと共に離れ給わぬ気持を感ずるのである。

私どもはよく仏のお慈悲と聞かされるが、ややともすると仏と云うものを相対的に考える、向うに仏が居りこちらに自分が居る、仏は向うに、自分はここに苦しんで居り、そして仏が如何にも向うから同情して呉れる、私を慰めて呉れる、と、感ずるのであるが、そうでなく、問題は生きた問題である、問題は自分のいのちと離れない、間髪も隙もない。一味になつて活躍したまう永遠絶対の生きたまことの動きであつて、十万億土の向うの問題ではない、今私が人生問題に苦しむその私のいのちの上に生きて働き、私の心と共に生きて動く大いなるまことである。

その私と云う者の、此の世の中で直接関係の深い方々は勿論、親やら兄弟やら、私に交渉を持たるる一切の人々の生命と一緒になつた私を、その大いなるいのちの中に摂取したまうのである。この私のいのちの全部を摂め入れ給う大慈悲に気が付いて来る、こう云うのである、この大慈悲を私が気づかせて貰うのである。そうすると阿闍世王の問題は、そのまま私の問題となるのである。

しかし、その後にも一つ問題が残る、それは或る方が問うて、

「それならば、お前は如何にもあざやかに世尊の大慈悲に触れているようなことを口にするが、念々に一声のうちにも親を忘れず、一念一刹那も世尊のお慈悲のいのちの中

に、念々に生々とした生活をして居るか」と問われると、時には生々とした生活をして居るように思う事もないではない、私は私の親が死んだとか言うような時には阿闍世王の立場のように感ずるが、咽喉もと過ぐれば熱さ忘るると云う事になつて、私は何処に、どういう世態に陥つて居るか、と申しますと、前に申し上げた一闡提に堕ちているわけであります。此の世のどんな立派な事にも感激もせず、どんな悪いことがあつても恐れるようにも感じない、しかしそれが、自分の利害と直接な関係でもあれば非常に感激するのである、自分の利害関係にばかり敏感で、利害関係の深いものにははつ〳〵と気が付くが、でないとちつとも感じない、何等の感じも持たないのである。利害に直接無関係なまことの問題にはどこ〳〵迄も鈍感である。つまり私は生きた屍である。その生きた屍が、時々ねじをかけると、電気によつてこち〳〵働いているようなものである、そして私と云う者の無自覚な生活が続いて行く。それが五十年七十年と続いても私のいのちはただ無自覚から無自覚へと辿つて行くのである。念仏称名の有難い事もない。利害関係にばかり敏感であり、真の問題にはどこ〳〵迄も鈍感で、又無自覚である。こういう事がこの私の上に投げかけられた大きな問題である。そして私は、その解決も出来ず、只大きな流れの中に流されているのであります。そこで私は阿闍世王の問題について三つ挙げられた最後の一闡提に過ぎないものである、と言うことになる。一闡提に始まつて、結局又一闡提に終るのである。そこに阿闍世王の無根の信と云われたその境涯が常住に開けるのである。信仰を持つというのではなく、持つても持たないと云う迄ことになるのである、私が持つて持たないと申す事は、私が意識もしない、感じもしないままに、大いなる親の独り働きというものがはたらいて、私の生命を貫くということであります。

甚だ尽くさないようでありますが、此の度のお話はこういうようなことで結びたいと思うのであります。唯一切衆生と共に此の一路に精進したい。その私の生命の動きを披瀝したつもりであります。

如来為一切　常作慈父母　当知諸衆生
皆是如来子　世尊大慈悲　為衆修苦行
如人著鬼魅　狂乱多所為

老苦について

花田正夫

先日、不図テレビを見ていますと、日本は老人の自殺率が世界で第一位であるとのことでありました。そこで戦后私のもれ聞きました不幸な老人のことを数えあげて見ますと両手にあまるのであります。家庭は至極おだやかなのに水中自殺された老母。或は立派な子を持たれているのに突然縊死された老父。また六十近い頑健な人が、一寸した病気を苦にされて度々自殺をはかつた末、一寸した家人の目をぬすんで決行。又、家族の者が皆或新興宗教に転じてしまつたのを苦にして自殺、等々、誌すもいたましい限りのことが思い浮びます。

さて日本が老人自殺が世界一であるということにつきましては、敗戦后の日本の特種事情が考えられます。

第一には、父祖代々継承された家族制度の破壊ということが挙げられます。現在の個人制度の善悪はさておいて、これによつて、六十年、七十年と働いて老域に達した人々の座を奪いとつてしまいました。今までは、よかれあしかれ、家の奥に座が与えられ、それが社会的にも、家庭的にも当然の場とされて、何千年と続いて居りましたのに、身はすでに老境にいたつて、その座を失い、何処かに探し出すか、或は新しく造らねばならぬとは、全く大変なことであります。

第二には、戦後の物心両面にわたる急激な変化に、老人は順応しかねて、おいてけぼりにされるということであります。そうでなくても、社会が大変革されるときは、新旧の対立があり、やがて若い者から〃時代おくれ〃と敬遠されるのが老人であります。それかといつて、自分自身の青壮年の時を省みると、矢張り老人への理解はチットも無かつたので、全く身から出た錆で、今になつて若い人々にもつと理解してくれと求めることが身勝手極ることであります。そこには訴えようのない孤独の灰色の道が、墓場へつながつて行くばかりであります。

その他の特種事情は色々ありましようが、時代の激しい渦巻に泳ぎきれないで、身も心も疲れはてて自滅する場合が多いのでありますから、現在の欠陥が時と共に補足せられ、又老人自身も段々と順応出来るようになれば、やがて世界並の率に好転することで、その時の一刻も早かれと願

うや切であります。

次に眼を転じて、「老人天国」と讃えられている、社会福祉の発達したスエーデンを見ますと、老人自殺はまた非常に多いのであります。こうなりますと、ただ外的な社会福祉事情が如何によくなつても、外面的に恵まれていると いないとを問わず、老苦ということが大問題なのだと知らされます。

仏陀はかねて「生苦、病苦、老苦、死苦」の四苦をあげられて、こればかりは万人のまぬがれられぬ、しかもそれに直面しては、一切の希望の花は色あせて、闇の砂漠をひとりでさまようほかにないことを警告して下されておられるのであります。

私自身、知らぬ間に六十を過ぎようとして、すでに十余年の間、痼疾の身、病苦、老苦に私自身が直面しているのであります。長い、ことに不治の病となりますと、丈夫な人々には理解して貰えない淋しさを——それは当然すぎることでありますが——いやというほど知らされますが、老苦にしましても、これから段々と深刻になることでありましよう。目はかすみ、耳は遠くなり、物忘れはする、気は短くなるそのくせ壮年期の夢は消えず、事毎に壁につき当り、若い人々との協調がむづかしくなる、しかもその切ない愚痴は、誰にも訴えようのない、身ひとりがうけねばならぬのであります。

かくして寒風に吹きさらされて冷えこむように、老人の心は段々とひがんでゆくのであります。そして、素直でなくなり僅かに独り遊びの盆栽いじりや、孫相手の日向ぼつこ、たまさかの神参りや寺参りとなるのでありますが、これも一時のがれにすぎません。

ことに長年共に苦労して来たつれ合いに先立たれた老人の心事は、まことにやるせないものでありましよう。そこで気の合つた老人同志が時々集つて、気がねなしに、同病同老相憐れんで語り合う一時を求めますが、ともするとそこに家族の愚痴やら親戚の不足をもらし、それが悪事千里で何時の間にか家人の耳に入り、大問題となつて、いよいよ一室に閉じこめられるようになります。

このように老人が僅かの暖かみを求めてたずね歩く陽の射す場所、日向ぼつこの出来る場所も、せばめられて行きます。そこで性格の強い人は、いやがらせをやり弱い人は、愚痴に明け暮れて、残りすくない余生の幕が、暗く淋しく閉じて行くのであります。

蓮如上人の御文の四帖目四通に

「それ秋もさり春もさりて、年月をおくること昨日もす

ぎ今日もすぐ、いつのまにかは年老のつもるらんともおもえずしらざりき。しかるにそのうちにはさりともあるいは花鳥風月のあそびにもまじわりつらん、また歓楽苦痛の悲喜にもあいはんべりつらんなれども、いまにそれと思い出すこととてはひとつもなし。ただいたずらにあかしいたずらにくらして、老の白髪となりはてぬる身のありさまこそかなしけれ。されども今日までは無常のはげしき風にもさそわれずして、我身ありがおの体をつらつら案ずるに、ただゆめの如しまぼろしのごとし。いまにおいては生死出離の一道ならではねがうべきかたとてはひとつもなくまたふたつもなし。云々」

と、六十三歳の御述懐があります。

数年前に亡くなられましたが、加藤捨吉さんという七十余りの篤信の方が来庵されて、

「いのちは法のたから、と申しますが、私もこの年になつて、蓮如上人の御晩年に書かれた御文などが、一句々々、その通り〳〵と身にしむようになりました」

と述壊されたことに、最近しきりに同感させられます。この御文は、老苦のありのままの表白でありまして、誰しも表にあまり言わないことをあけすけに打ち出されての御導きであります。

ことに四帖目二通の「定命の章」と世間にいわれている御文は、その底を衝かれたものであります。

「それ人間の寿命を数うれば、今の時の定命は五十六歳なり。しかるに当時において、年五十六までいきのびたらん人は、まことにもていかめしき（めずらしい）ことなるべし。これによりて、予すでに頽齢六十三歳にせまれり。勘篇（計算）すれば年はやは七年まで生きのびぬ。これにつけても前業の所感なればいかなる病患をうけてか死の縁にのぞまんとおぼつかなし、これさらにはからざる次第なり。

ことにもて当時の体たらくをみおよぶに定相なき時分（無秩序の時代）なれば、人間のかなしさは思うようにもなし。あわれ死なばやと思わば、やがて死なれなん世にてもあらば、などか今までこの世にすみはんべりなん。ただ急ぎても生れたきは極楽浄土、ねがうても願いえんものは無漏の仏体（煩悩の黒雲の晴れわたるさとりの境界）なり。

しかれば一念帰命の他力安心を仏智より獲得せしめん身の上においては、先生より定まれるところの死期を急がんもかえりて愚かに惑いぬるかとも思いはんべるなり。このゆえに愚老が身上にあててかくの如く思えり。たれの人々もこの心中に住すべし、云々」 文明九年九月。

とあります。文明九年の頃は、応仁の乱が十年近く続き、足利幕府の威信は地に落ちて、管領家（幕府の執権役）の細川と山名の反目、将軍家と管領家の家督争乱のため京都や近在の寺社、家屋も兵火に罹つて惨状を極め、秩序は乱れて盗賊が横行するという有様でありました。又文明九年には摂津で畠山政長と義就が同族戦うと云う惨事がありました。蓮如上人は文明七年に吉崎を出て河内国の出口に移り、その一部始終をまざ〳〵と御覧になつたのであります。

この御文も、『御文略解』によりますと、江州大津の鏡屋八郎兵衛が剃髪して、久々に上人の御前に参り、年来の恩を謝し、且つ「此上無益の生をながらえることを好みません、早く死を急ぎとうございます」と申上げたのを、お誡めになつたものであると伝えられます。

世上の有為転変に遭うて、老苦をかかえた人の愚痴のありだけの訴えに対して、切々たるお導きであります。

「自分も定命をすぎて六十三になつた。明日をも知れぬ生命であるが、この世の有様を見るに、乱世無秩序極りないことで、苦しみが到るところに満ち〳〵ている。もし何事も思うようになるのであれば、死を求めもするであろうが、仏がかねて仰せられる通り『死を求めて得ず生を求めて得られず』と、思うように何でも出来るという世の中ではない。宿業の網にしばられて微塵も自由気ままには出来ない世である。

しあわせにも人間に生をうけ、信心決定の身には、人生究極の大目的である往生成仏の大願が、仏力によつて満足されている身であるから、死期を急ぐこともいらない。生に着せず、死を求めず、業報に随順して、仏光照護のもとに天寿を完うさせて頂くばかりである。自分はこのように、我身の上で味つているから、皆々同じ心中に住するように、云々」

とのお誡めであります。そして、この御文の終りに

「人生無常であるから、急いで聞法して、人生緊急の一大事、往生成仏の一道を聞きひらくように」

と力強く勧めていられるのであります。

以上なが〳〵と書きましたが、訴えようのない老苦、そのことを釈尊がかねて徹見されて、大悲うむことなく、御自らそこを超越されて、徹底した御理解と御同情をもつて

「我に来れ、我にたよれ。念仏申せ」

と喚びつづけて下さる御本意を、老苦、病苦の我身にうけて、御一緒下さるお方のふところ一つに、私共の心の座を頂き、三界安きところ無き身に、唯一無二のよるべを恵まれるのであります。

私共小さい頃、正直爺さんの童話をよく聞きました。又歌でも習いましたが、正直爺さんが枯木にのぼりて灰をまくと、不思議や枯木の枝々に、美事に花が咲いたとあります が、世にも不思議なお方がましまして、枯木同様の身に信心の華を咲かせ、念仏の実をみのらせて頂けば、何という喜びでありましようか。このお方こそ、まさしく地上は灰色の砂漠と化することでありましよう。

往々に世間で、蓮如上人の御文について、人生の無常とか老苦、死苦をそのまま述べていられることを、感傷的すぎるとか、消極的であるかのように評する人が多いのでありますが、私はそう思いません。むしろ御自身が老境に達せられて、素直にその苦を打ち明けて下され、そこに本願の救済の御手のましますことを、切々とお教え下さる老上人こそ我々凡愚人への無二の勝友となつて下さるのであります。

このことにつきまして、明治二十一年に、剣と禅の極意をきわめた山岡鉄舟居士が、胃癌になり、それが破裂して腹水がたまつた最後の夜明け方に、

腹張つて苦しきなかに明け鳥

の一句を弟子の千葉立造氏に示して、午前九時に命終されたことが思いあわされます。これは文字通り辞世の句であります。ところが主だつた弟子方が、この句は平素の元気な先生の心に似ていないからと発表をためらつて居ましたが、そこへ某禅師が弔問に来られ、この句を見て

「これこそ某禅に徹しられたお方！」

と感歎せられたのであります。昔の者も驚いた苦、それを辞世の句として発表したのであります。

禅家にもこうした味わいのあることを知らされて、教えられることであります。

又、歎異抄の九章の

「よろこぶべきところもなく、急ぎ浄土へ参りたき心無き者を、かねてしろしめし、ともにあわれみたまう」

との聖人の御言葉を、唯円房は聖人を小さくしすぎているなどと評する人や、甚だしい人は、この九章などは無用であると豪語するむきもあるときますが、そういう人こそ聖人のひいきの引き倒しをする人で、鉄舟居士の辞世の句をかくそうとするこざかしさに等しいのではありますまいか。深くして広い大信海の法味を、其時、その場の思いつきからあれこれということ自体が、せまい聖人におさせ申していることでありましよう。

唯円房にしたところが、直々に聖人のお育てを蒙つた弟子であり、歎異抄にも「またく仰せにてなきことをも仰せとのみ申すこと、あさましくなげき存じそうろうなり」と

まで書きのこされる方が、聖人の仰せでないことを仰せと述べられるはずがありますまい。

加藤捨吉さんのように「いのちを法の宝」として、蓮如上人の御言葉をそのまま我身に頂き始めましたことは、枯木の花の不思議さであり、かけがえのないよろこびであります。

すべて仏法には、夕陽が西に没して、そこに星や月のひかりがあらわれるように、青年も過ぎ、壮年も過ぎ、健康も失うというような経験を縁として、今まで知られなかつた深く広い仏心の照護を蒙り、生きかえらせて頂く趣があります。

人生六十の坂の一里塚として。

× × ×

馬鈴薯

ツルゲネフ

昔、農夫らは、馬鈴薯をもたらした旅人をのろつた。パンの代用、また貧者には日々の糧ともなる貴い賜物を彼等は旅人の差出す手から叩き落し、泥土に委ね土足に掛けた。それが彼等の常食となつた今日、彼等はその恩人の名さえ知らぬ。それもよし。彼の名が何で要ろうか名は無くとも、彼は農夫らを飢えから救う！

耳底の信味

北村乗雲

〈註〉初秋の一日、東京の北村乗雲氏が来庵下され、永年近角先生のお導きをうけていられるうちに、そのお言葉が耳の底に残つて身体にとけていて何時も折にふれては思出されるものの二つを聞かせて頂きましたので、私するにはしのびず、誌させて頂きます。

聚墨生

○

どこ〳〵までもおあきれないのは仏様、我々がこれで一生を通すとなれば、自分がつらくなる、が……先様にも仏様がついておいての事なれば、私共如き凡夫が心配してもはじまらない。仏様がついてのおいとまをさせていただくばかりである。

○

仏法を聞く人が、石段でものぼる気で聞いているが、さうでない。聞けば聞くほど石段を下るのだ。——しかしよう気をつけて下らないと大怪我をする——そしてこれより下はないところにおろされ、人のよしあしでなく自分が一番悪人だと知らされて、お慈悲にすくわれるばかりである。

あとがき

本月号は、名古屋刑務所が近く三好町に移転となり、二ケ月余り印刷の仕事が中断せられますため、合併号とさせて頂きました。次の慈光も二・三月号を合併して発行致す予定でありますが、何卒御諒承下さい。

○

さて十二月は近角常観先生の御忌月でありますので、毎年何かそれにふさわしくと願つてまいりましたが、今回は、先生が御大病になられます直前、福岡市で御講話下さいました、いわば、先生の公開の御講話の最后のものを全文掲げさせて頂きました。又先生の御著書も漸次再版頂けます機縁が熟して参りました由、近角真観様からお知らせを頂き、喜びお待ち申して居ります。

思いますのに、戦後の行き過ぎた自由思想の普及から、一切の伝統とか秩序というものが無視されて、各自の勝手な心ばかりで聖教を解釈し、ひとりよがりな書物が氾濫して居りますことは、将来の求道者の大きな障害となることであります。聖人の「親鸞私なし」の御徳光は永く世を照破して下さる灯火であります。それにつけ近角先生の、右を説かれると左をも述べられ、前に導かれるとうしろをも注意して下さる、全く偏らず頗かず、周到極りのないお導きをいよ〳〵渴仰申すことであります。

又、福島先生の「人生問題と信仰」は御自身を一闘提の上に見出されましての御信味そこに私共の心の底の底まで注がれる大悲の御手を知らされます。

忽々の間に編集いたしまして、歳末、歳始の誌上のお挨拶も申上げず、失礼の程深謝いたします。

× × ×

慈光第十六巻 第十二号 昭和三十九年十二月十五日 発行（毎月一回十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可

御安内

一道会例会。毎月第一、二、三日曜午后一時半。市電、新郊通り一丁目下車、東へ一丁半。

教西寺法話会。毎月廿四日午前午后、昭和区小桜町。

市電、御器所通り下車、桜花学園の東。

謹告

意訳歎異抄 池山先生著

実費百円、送料二十円、で頒布いたします。慈光社か、京都市右京区山田開町浄住寺まで申込み下さい。

定価 半年 二百円（送共）
一年 四百円（送共）
名古屋市南区駅上町二ノ八八
編集・発行人 花田正夫
名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷人 本田政雄
名古屋市南区駅上町二ノ八八
発行所 慈光社
振替口座名古屋一〇四七〇番